

現象学と社会システム論における意味の概念

小 熊 正 久

(哲学)

「意味Sinn」はフッサールの現象学においてもルーマンの社会システム論においても中心的な概念であると言ってよいであろう。フッサールにおいては、「意味」は対象に向かう意識の志向性を成立させている最も重要な契機であるといっても過言ではない。他方、ルーマンの社会システム論の全体像を提示している書物『社会システム理論』の構成をみるだけでも、そこでの「意味」概念の重要性がうかがえる。ルーマンは、「第一章 システムと機能」で「システム」についての総論を提示したのちに、いわば各論の最初に「第二章 意味」を配置し、あとの所論の前提としているのである。大まかに言えば、フッサールにおいては、「意味」は「主観性」と「世界」の関係を表すものであり、ルーマンによれば、特定のシステムにとって「環境」は「意味」という形態で与えられるのである。

後期フッサールにおける世界経験と意味の関連の考察は、経験の地平構造や可能性の契機を意味と関連させているが、ルーマンはここから多くの示唆をえるとともにその含意を明確化している。またさらにルーマンは、「システムと環境」という観点から意味の「機能」についての見解を示し、そこから、「コミュニケーション」や「情報」といったいわば現代社会のキー概念と「意味」概念の関連を考察している。

そこで、小論では、現象学（フッサール）と社会システム論（ルーマン）における「意味」の概念を明確化する作業を通して、広大な意味概念を統一的に把握するための手がかりをえたい。

ルーマンにおいて「意味」は、われわれが何らかの仕方において体現している「心理システム」および「社会システム」の構成にとってきわめて重要な役割をはたすのであるが、ルーマンは、システム論における「意味」の位置づけをおこなうにあたって、フッサールの現象学での「意味」の取り扱いを継承していることを明言している。そこで、最初に、フッサールの「意味」の分析を見ておくことにしよう。

一 志向性における意味

フッサールの現象学における「志向性」のなかで「意味」がいかなる役割を果たしている

かを見るために、まず、意識の志向性の構造を定式化した『論理学研究』第二巻第六研究を参照したい¹⁾。

フッサールは、何らかの対象に関して言表を行ったり言表の確証をするという場面にそくして、表現に意味をあたえる「意味付与作用」——「意味志向」とも呼ばれる——と志向された意味を満たす「意味充実作用」とを区別する²⁾。例えば、何らかの知覚を行いつつ「ツグミが飛んでいる」という言表を行う場合、同じ事柄を知覚していても、この表現のほかに「これは黒い鳥だ」とか「黒い鳥が飛んでいる」というような異なった言表をすることも可能である。また逆に、同じ表現を使っている、異なる風景を知覚していたり、知覚ではなく想像していたりして別の直観がその言表に対応すること、さらに、言表に直観が伴わない場合（言表が「空虚な」場合）もありうる。けれども、それらの言表の意味そのものは「同一」であると考えられる。それゆえ、フッサールは先の「意味付与作用」と「意味充実作用」は異なる作用であると結論する。両者が同じ作用だとすれば、それらを構成する「言表」と「直観」も一対一に対応しているはずだからである。

さて、『論理学研究』におけるこの二つの作用の構造の分析を見ると、「意味付与作用」は語音や文字の文様などに「意味」を付与する作用であり、「意味充実作用」はその意味に適合する対象を代表象する者（代表者Repräsentant）としてはたらく感覚や想像からなる。ところが「意味」そのものは、それぞれの作用と関連してはいるが時間的に経過する作用とともに消滅するのではない「同一性」を保つゆえに、「理想的ideal」存在であって、意識作用に実的(reell)には含まれていないとされている——「意味は意識に「志向的」には内在するが、「実的」には内在しない」とも言われる³⁾。

こうして「意味」は二つの作用における不可欠な契機とされているが、上の分析は、二つの作用と「意味」という契機の関連について十分に解明しているとは言えない。二種類の時間的に経過する作用が、意味という理念的な契機とどのようにかわるか必ずしも明らかでないからである。小論に係る「意味充実作用」だけに関して言えば、問題点は、「意味」と「感覚的与件」がまったく異なる種類のものと見なされていること、すなわち、感覚的要素は「意味」を全然含まないという見方にあると思われる。

こうした『論理学研究』での「志向性」と「意味」の分析と対比してみると、後期フッサールの著作では、経験について時間的観点、地平的観点からの分析が進捗し、上の問題にも解答を与える形になっている。そこで、ルーマンも意味概念の論述において参照している『経験と判断』におけるフッサールの分析を見ておくことにしよう。これは、「述語定立的判断」の発生にかかわる分析という意味で、「発生的分析」と呼ばれることもある。

二 地平および可能性との関連における意味

『論理学研究』において対象を代表象する者（代表者）の役割を果たしていた「感覚的与件」は「発生的分析」では「感覚の場」(E.U. § 16.) として解釈し直されている。そして、「感覚の場」については、「この場は単なる混沌、単なる“所与の混乱”ではなく、一定の構造、際立ち、分節化された個別性の場」であると言われており、もはや「純粋な感覚的与件」とみなされてはいない。「感覚的与件」はすでに「構成的総合」によって産み出されたもので、形式面から見れば「同一性の統一一般を構成する」時間意識の総合の産物、内容面から言えば「連合作用Assoziation」の産物なのである。すなわち、「感覚の場」の中で何かが際立つということは、場全体を支配する（例えば色という）「同質性ないし類似」と（例えば赤と白との）「対照」が前提となっている。この類似と対照を成立させている作用が、「何かが何かを思い出させる、ないし、指示する」という構造をもつ「連合作用」と呼ばれているのである。ここではとくに、「感覚の場」において「同質性と対照」、すなわち、「同一性と差異」が働いていることに注意すべきである。

さらに、「感覚の場」よりも広範囲の「知覚野」全体の分節に目を移せば、そこには知覚における「地平構造」と「自我の連続的な活動」との関連が見られる。例えば、眼前にあるコーヒーカップが、顕在的には見えていない裏側という「内部地平」をもつことは「カップの向こう側へ廻ってみれば、裏側が見えるだろう」という「可能性」の意識と同義である。すなわち、コーヒーカップの現れはその裏側を「可能性」として指示しているのである。このことは対象を取り巻き、ほかの対象を含む「外部地平」にも妥当する。

こうした地平現象は、「経験の個別的对象について認識活動が行われる際に、この対象がまったく無規定の基体としてあらわれることは決してない」ということ、すなわち、対象が何らかの“意味”で（例えば「本」、林檎あるいは「赤い物」として）「あらかじめ知られていること（既知性, *Vorbekanntheit*）」と関連している。この「既知性」により、本を開いてみる、林檎の香りに注意する、赤い物にもっと近づいて見るといったさらなる経験の仕方が「指示」されているのである。

フッサールの言う「本質看取 *Wesens-erschauung*」もこうした経験の構造に応じて成立している。対象についての前もっての経験にもとづいてあらかじめ形成されている対象のタイプを自覚的に対象化して、たとえば「コーヒーカップ」というタイプで把握される対象はどの範囲であるかを見定めるのが「本質看取」である。その際には、諸対象の「同一性と差異」や対象の「可能性の枠」そのものが主題化されていると言ってよいであろう⁴。

知覚的経験の場での「意味」の現象とは、対象が、「外部地平」や「内部地平」のなかで、すなわち、指示の構造や、同一性と差異の構造をとまって出現することにほかならない。

『論理学研究』などにおいては抽象的であった「意味」の概念は、後期の「発生的分析」において、以上のような形で、「経験」との連関において深められていたのである。

なお以上と関連して、環境に対する人間の行動様式が諸対象の構造の「意味的同一性」や「可能性」にかかわるものであるということについては、メルロ＝ポンティが『行動の構造』の中の「行動」における「象徴的形態」の概念を参考とされたい⁵。

三 ルーマンによる現象学的意味概念の継承

ルーマンは、『社会システム理論』において、「意味とは何かについては、現象学的な記述の形式において、最も明確に示されている」としたうえで、次のように言っている。

「意味という現象は、体験や行為のさらなる諸可能性を過剰に指示するという形式において現れる。あるものが、視線の集まるところ、つまり志向の中心に存しており、ほかのものは、“等々”という形で続く体験や行為のための地平として、周辺において暗示されている」（SS., D93/J93.）。

われわれは、この叙述がフッサールの言う「内部地平」や「外部地平」を念頭においたものであることに気づくであろう。だが、ルーマンはこれをみずからの用語を使って次のように表現しなおしている。

「有意味的に志向された対象を起点とする指示はことごとく、次の段階でじっさいに顕在化されうる以上のものを提示している。それゆえ、意味という形式はその指示構造をとおして、次の歩みを選択するように強制している（zur Selektion zwingen）」（SS., D94/J94.）。

すなわち、「意味」は諸可能性を示すことによって、あるシステムに次の段階の「選択」を強制するのである。

さらにルーマンはこの「諸可能性」を、彼の「複合性Komplexität」という概念に関連させている。

「それぞれの意味、任意の意味によって、途方もなく大きな複合性……が呈示されており、こうした複合性は、……使用可能なものとして保持されている」（SS., D94/J94.）。

「複合性」という用語については小論第五節でより詳しく見るが、ここでは暫定的に、「実現しうる出来事の諸可能性が相互に指示的に関連しつつ複合していること」と解してよい⁶。或る出来事が選択され実現されてもこの「複合性」は無になるのではなく、保持されていて、このような仕方では、どんな意味も「あらゆる複合性において含意されている選択の強制を再定式化している」のである。

こうしてルーマンは、「意味とは複合性の再現にほかならない」と要約しているが、さらに、

われわれが先に見た「意味」という契機を含む「意味付与作用（意味志向）」と「意味充実作用」を「自己準拠Selbstreferenz」—— それ自体に関係すること —— という特徴に結びつける。

「それぞれの意味志向が自己準拠的であるのは、そうした意味志向がそれ自体の再顕在化可能性をも同時に見込んでいるかぎりにおいてであり、したがって、その意味志向の指示構造によって、当の意味志向をさらなる体験や行為の多くの可能性の一つとして再び受け入れるかぎりにおいてなのである」（SS., D100-101/J102.）。

「意味付与作用」と「意味充実作用」の両者は、「意味付与作用におけるのと同じ意味の事象が意味充実作用において顕在的に与えられる」という形で、「自己準拠的」なのである。先にみた「複合性」において実現された可能性を顕在性と解して、その「複合性」が「顕在性と可能性」の側面を表しているとするれば、「自己準拠性」は「同一性と差異」の側面を表しているといえよう。「同じ意味の対象を志向し、それが与えられる」ということは、対象の意味的同一性を含意しているとともに、ほかの対象との差異、および、先ほどの作用と今の作用との差異を前提しているからである。

そして、〈顕在性と可能性〉ならびに〈同一性と差異〉の概念は以下のように関連づけられている。

「差異と同一性の差異は、顕在性と可能性の差異をその操作においてコントロールするために、この差異に対していわば交差するようにはめ込まれている。可能的なものは、（ちょうど顕在化されているものや、再び取りあげられうるものを含めて）さまざまな可能性の差異として把握されるし、そのさいその顕在化される可能性は、その同一性において、これであってほかではないものとして表示される」（SS., D100-101, J102）。

なお、ここで「差異と同一性」の差異、「顕在性と可能性」の差異という形で述べられている「差異」とは、ここでは暫定的に、それぞれにおいて一方の契機が他方に還元されず、しかも相互に前提となっているということの表現と見ておく⁷。

以上のようにルーマンは、フッサールが知覚野の構造や意味付与作用・意味充実作用にそくして呈示していた現象学的意味概念を継承しているが、それを、「選択」、「複合性」、「自己準拠性」といったシステム論の用語で捉え直しているのである。われわれは、システム論における「意味」概念の考察に移ろう。

四 ルーマンの初期論文における「意味」

本節では、ルーマンの初期の二論文「社会全体の分析形式としての現代システム理論」、
「社会学の基礎概念としての意味」にそくして、具体例をも含んだ「意味」の取り扱いの概要
を見ておき、次節以降で、彼の「システム」概念を詳しく見ることにより、「意味」概念の正
確な把握を試みることにする。

ルーマンはフッサールの意味概念を継承するにあたって、フッサールの「意味付与作用」
や「意味充実作用」を行う「主観性」の存在をそのまま認めるのではなく、以下に見るよう
に、それを「意味を使用するシステム」と規定しなおしている。

「通常意味の概念は思念作用の主観性に関連づけることによって説明される。またまさ
しくそのゆえに意味の概念ははなはだ非学問的なものとして低く評価される。けれど
も意味概念は、そのみをとるあげるのであれば、主観概念よりも簡単に明らかにす
ることができる。したがって主観によって意味を規定せずに、逆に主観を意味によっ
て規定すること——つまり、意味を使用するシステムとして規定すること——の方
が当をえている」（TOS., D12/J9.）。

このように「意味を用いるシステム」を意味操作の当事者と規定することによって、彼は「意
味」を「システムと環境（Umwelt）との差異」にかかわる事柄として規定していくのであ
る。この見方の転換⁸は非常に重要であるが、この転換自体を扱うことは、多岐にわたるシ
ステム論と現象学の問題全体に立ち入らざるをえないため、小論の主題とすることは
できない。この転換によって「意味」がどう捉えられるかに絞って考察を進めよう。

「意味」の取り扱いの前にまず、諸システムの分類について簡単に見ることにより、諸シ
ステムのイメージを喚起しておきたい。ルーマンは、システムの例として、機械、有機体、社
会システム、心理システムなどを挙げている。このうち「心理システム」は、「（誰かの）体
験と行為の意味的連関の統一」（TOS., D29/J33.）あるいは「意識をとおして意識を再生産し
ておりその点では他に依存することなく自立しているシステム」（SS., D355/J493.）などと
規定されている。またその際、「心理システムの理論」と「超越論的現象学」の関係について
以下のように述べられている。

「双方の理論は、とりわけ……意識の時間性への洞察において、すなわち、意識は過去
の出来事を記憶して保持したり、未来の出来事を予想したりしながら、常に現在にお
いて操作しておりかつ意識はその現在に決してとどまりえないというテーゼでは一致
している」（SS., D356/J494.）。

ここから、「心理システム」とはフッサールの記述した内的時間意識をそなえた統一的な意
識のはたらき全体をさすものと考えてよいであろう。こうした「心理システム」から、ルー

マンは「社会システム」を区別する。相違点を一つだけあげれば、「心理システム」は——意識であるゆえに——「伝達」を含んでいないのに対して、「社会システム」のほうは、「情報」と「伝達」と「理解」から成り立つ統一体としての「コミュニケーション」によって成立するのである。こうして二つのシステムは区別されなければならないのであるが、両者は無関係ではない。それは、「(それぞれのシステム自体の複合性とその環境の複合性といった)複合性を描写するために……, どちらのシステムにおいても“意味”が用いられている」という点で関係があるとされている(SS., D367/J509.)⁹⁾。こうして、「意味」は上の両方のシステムによって、しかもこれらのシステムによってのみ使用されるのである。なお、「心理システム」と「社会システム」を包括するものとして、「意味システム」という名称が使われることもある。

以上、諸システムの分類を一瞥したが、つぎに、上の二つのシステムにおいて使用される「意味」の役割を概観しておくことにしよう。

「意味とは、複合性の大きい条件のもとでの選択的行動の一定の戦略(Strategie)である。有意味な同一化によって個々には見通しのきかない異なる体験諸可能性への豊富な指示をまとめたり、つきあわせたりすることができるし、また豊富な可能的事態のうちに統一をつくりだすことや、そこからさらにこの指示連関の個々の局面にもとづいて選択的に自己を方向づけることができるのである」(TOS., D12/J9.)。

先にみた箇所と同様に、諸可能性が様々な指示関係にあるということが「複合性」と言われ、それによる諸可能性の間での選択の方策が「意味」と呼ばれている。顕在化された以外の諸可能性が保持されているということにより、システムにおける「複合性」も「意味」も成立しているのである。

ところで、ルーマンによれば、「システム」には「環境」が対しており、システムと環境との「差異」ないし「境界」が或る「システム」を成り立たせている。この点から「意味」の機能を捉えなおす必要があるであろう。

だが、空間的な境界であればイメージしやすいが、「意味システム」と「環境」の「境界」はどのように考えたらよいであろうか。ルーマンはその「境界」を、「環境の複合性」と「システムの複合性」の「落差」と捉える。ルーマンの説明を見ておこう。

「意味境界(Sinnngrenzen)はシステムと環境を異なる複合性の可能性領域として切り離す。環境はシステムよりも……つねに大きな複合性をもつものである。意味境界はこの複合性の差異をきわだたせ、これを体験の方向づけのために使えるようにする」(TOS., D73/J77.)。

或るシステムの中では行為の可能性の特殊で既知の諸条件が当てはまるのに、そのシステムの外部では何かほかの諸条件が当てはまる(TOS., D73/J77.)。つまり、システムに応じて

複合性が異なるのであり、例えば〈学部〉システムは、その環境をなす〈家族〉、〈劇場〉、〈教会〉、〈科学〉、〈ナイトクラブ〉などの規則を含んでいない——この例では環境は様々なシステムに分化している。そこで、「境界」を越える場合には、そこで適切な行動をしようとするれば、一体自分がどのシステムに向かうのか確かめておかなければならないのである。こうしてみると、「複合性」とは、いわば、それぞれのシステムや環境において指示連関にある諸可能性の網の目のようなものであり、その細かさ（複合性の程度）や様態はシステムごとに異なるのである。

このように、「複合性の落差」によって境界づけられたシステムにおいて示されている、あるいは選択を強制している諸可能性を用いる戦略が、「意味」だということになるだろう。

次に、『社会システム理論』にしたがって、要素と関係という点からシステムと環境の規定を見た上で、システム論のなかでの「意味」の把握をより正確なものとしたい。

五 要素・関係・複合性

ルーマンによれば、あるシステムはそれと環境との差異を維持することにおいて成立している。この点で、ルーマンのいう「システム」は、諸部分からなる全体の概念や諸要素が関係し合っていて外部と無関係だとみなされたシステム概念と異なる¹⁰。だが、環境との差異についてはのちに再度考慮することにして、ここでは、「要素Element」および「関係Relation」の側面からシステムを考察する。

システムを構成する単位は「要素」と呼ばれ、諸要素はシステムにおいて何らかの仕方で「関係」づけられている。たとえば、石、角材、釘などを家屋というシステムの要素と見なすことができる。ただし、何が或るシステムの要素と見なされるかは、そのシステムに応じて異なる。幾つかの種類の原子が要素である場合もあるし、人間的有機体が要素であることもある。また、相似した単位から多様なシステムが構築されることもある¹¹。さらに1つのシステムに新しい要素が加わったり生成したりすることもある。

システムにおける「要素」間の「関係」は、次のように説明されている。

「あるシステムにおいて、あるいは、あるシステムにとって環境として集められなければならない要素の数が増加すると、それぞれの要素がそれ以外のすべての要素に関係させるのがもはや可能ではないような閾にたちまちにして突きあたる」(SS.,D46/J37.)。

たとえばa、bという二つの要素間にFという関係がなりたつことをF(a、b)と表現し、F(b、a)も別に数えることとすれば、この二つの要素間には2通りの関係が成立しうる。同じことをa、b、cの要素について考えれば6通り、n個の要素について考えれば、

$n \times (n-1) \times \cdots \times 1 = n!$ 通りの関係が成立するということになる¹²。このように多くの関係が数え上げられるのだが、要素数が多くなれば実際にはそれらが全部実現可能だというわけにはいかなくなる。要素数の増大により、そうした閾（境目）にすぐ到達するというのである。「複合性」の概念はこうした考えにもとづく。

「複合性の概念の規定はこの発見に結びつけられる。諸要素の結合能力の内在的制限のゆえにもはや全ての要素が全ての他の要素に対して結合されえない場合、そうした要素からなる関連しあっている集合を複合的であると表現する。“内在的制限”の概念は、諸要素がその内部に有している複合性が、システムにとって自由に処理できないものであることを指し示している」(SS., D46/J37.)。

たとえば諸要素の性質や諸要素の空間的配置といったシステムの制約により、論理的に数えられうる関係がすべて実現可能ではないとき、可能な関連しあっている要素の集合を「複合的」と名づけるのである。

このように、先に「諸可能性」に関して言われていた「複合性」が、要素間の関係の特徴として規定された。「可能性」とは要素間の可能な関係のことであり、「現実性」とは或る時点で現実に成立している関係とみなすことができよう。

六 システム・環境・意味

こうした「複合性」の概念を使って、「システム」と「環境」の関係を以下のように考えることができる。

「それぞれのシステムにとってその環境は、システム自体よりもより複合的である……。システムには、その環境のすべての状態に反作用しうるために、またはまさにシステムの状態に適合するように環境をしつらえるためには“不可欠と考えられる多様性”(……)が欠けている。言い換えれば、システムと環境の間の細目にわたる一対一の対応(つまり、システムの複合性と環境の複合性の差異を除いて、両者の差異を廃棄してしまう状態)ということはあるえない」(SS., D47/J39.)。

この考えは、たとえば、われわれのおこなう環境(自然界)の認識ということを考えてみれば納得されるであろう。われわれは、科学的な知識として、環境(自然界)の要素や関係について、元素や法則的關係などの形でさまざまなことを知っている。すなわちわれわれは「複合性」をそなえた意味的システムを使用している。だが、環境(自然界)そのものはわれわれの知識を上回る「複合性」をそなえていて、そのゆえに、新しい物体が見つかったり、思わぬ要素同士が関係したり、新しい法則的關係が見つかったりするのである。こうした知識の獲得にはきりが無い。また、もし「複合性」に関してわれわれの意味のシステムと自然

的環境の間に「一対一の対応」が成り立つとすれば、ちょうど自然を複製するような具合にはなるかもしれないが、それを認識とは呼べないであろう。

以上のようなシステムと環境の間にみられる「複合性の落差Gefälle」のゆえに次のような事態が生じる。

「両者の間の複合性の落差にもかかわらず、その差異をしつらえたり、それを維持することがシステムの問題となる。システムの複合性が環境のそれよりも劣っているということは、選択の戦略によって埋め合わせられなければならない」（SS., D48/ J39）。

これは、環境にかんする新たな分類や法則の獲得や使用といったことを意味するであろう。また、知覚器官や画像を写し取ったり文字を認識したりする認知システムの「複合性」を考えてみるとわかるように、一般に、環境における「複合性」すなわちさまざまな差異を必要な程度に識別し処理するには、求められている「複合性」に応じた「複合的」な操作が必要なのである。次の文はそのことを述べている。

「システムの諸要素の関係づけにおいて、いかなる秩序づけが選ばれるかは、その環境の複合性に対するシステムの複合性の差異のいかんによっている」（SS., D48/ J39.）。

またこのことと関連して、或るシステムが、環境とのある程度の複合性の差異を維持しながら自らの複合性によって環境の認識をおこなっているような場合、「システムの複合性」は「環境の複合性」に対して「複合性の縮減Reduktion der Komplexität」をおこなっていると言われる。

生物の分野から例をとれば、アメーバやイソギンチャクのような比較的単純な生物でも環境を認識し的確な行動をおこなうためには、ある程度の複合性が必要である。たとえば、アメーバにとって栄養となる物質かそうでないかを認識し、それに応じた対応をするためには、少なくとも二つの種類の物質に違った反応をすることが必要である。また、イソギンチャクにとって（その餌となるものの近さとともに変化する）有益な物質の濃度に応じて、イソギンチャクはその行動の様子を変える（銚のごときものを発射したり、口にあたる部分を開いたりする）が、そうしたことはそれなりの有機体の要素や諸運動の複合性が必要であろう。また、それらの認識の網の目は、環境の複合性をそれらの複合性に応じて「縮減」した結果となっている。だが、そうした生物の行動にはほとんど可能性というものはない。それに対して、人間のような生物の行動には、可能性、選択の幅がそなわっている。この場合、意味に関連する「複合性」は、現実性に対する諸可能性や選択肢という形で現れていることになろう。しかも、その複合性は以前の状態を参照しながら（つまり「自己準拠的に」）刻々と変化すると言えよう。

さて、システムと環境の「複合性の落差」の考察を終わるにあたって、「意味」についてのまとめを見ておこう。

「意味とは、自己準拠にもとづいて複合性を処理するさいの一般的形式にほかならないのであり、こうした形式は、（他の内容を排除したうえでの）特定の内容を言い表すことによって特徴づけられるわけにはいかない」（SS., D107/J111.）。

「複合性」とはその時々顕在性と諸可能性、また、それらの間の同一性と差異によるシステムの特徴であり、まさしくこうした形式において選択を行う戦略が「意味」にほかならない。そして、「諸可能性」とは、最終的には要素間の可能な関係のことである、と解することができよう。

ところで、上の箇所では、意味は「複合性を処理するさいの一般的形式」とされ、それが「形式」であることが強調されている。しかしながら、このことは、意味がある内容をもつことを否定するものではない。ルーマンの論述を追ってみると、意味が「形式」として扱われている箇所もあるが、個別的なものないし「内容」として扱われている箇所もある。たとえば、「それぞれの一定の意味」という表現や「それぞれの意味、任意の意味」という表現も見出される。そこで、小論の以下の論述では、必要な場合、前者を「形式としての意味」、後者を「内容としての意味」ないし「諸可能性としての意味」と呼びたい。そのさい、「内容としての意味」といえども「形式としての意味」の支配下にあることは言うまでもない。次の文が両方の「意味」の関連を表していると言えよう。

「意味は、—— 内容ではなく形式による —— 複合性の再現にほかならない……」。さらに、「そもそも意味が現実的なりアリリティを獲得するのは、そのつどそれ以外の意味への指示によってのみなのである。そのかぎりにおいて、それ自体で自足的な個々の意味は存在しない……」（SS., D95/J95.）。

「内容としての意味」や「個々の意味」が存在しないというのではなくて、それらが自足的であると見るのが誤りなのである。

七 コミュニケーション

以上の「意味」との関連において、「コミュニケーション」はどのように考えられるであろうか。まず、コミュニケーションによって形成される「社会システム」について、次のように説明されている。

「……〔社会〕システムの中で単位（要素）として機能するものを構成するためには、相異なるパースペクティブを有する（少なくとも）二つの複合体が必要である」（SS., D66/J60.）。

ここで「単位（要素）」と言われているのは、「社会システム」における単位（要素）であり、個々の「心理的システム」における要素ではない。では、二つの複合体の間で何が起こ

るときにコミュニケーションが成立すると言っているのであろうか。それは、次の文で説明されている。

「二つの複合体Aと複合体Bがそれぞれの状態決定のいくつかのほかの可能性を有しているのに、複合体Aの状態の変化が複合体Bの状態の変化に対応する場合にのみ、過程の技術的装備はどうであれ、われわれはコミュニケーションということを言えるのである」(SS., D66/J60.)。

たとえば、「xが起こったときにはyが起こる」($x \rightarrow y$)という形の幾つかの状態変化の論理的可能性を有する二つの複合体、

複合体 ① ($a \rightarrow b$, $a \rightarrow c$, $a \rightarrow d$, ...)

複合体 ② ($a \rightarrow b$, $a \rightarrow c$, $a \rightarrow d$, ...)

を考えよう。

それらの間に、たとえば「aが起こったときにはcが起こる」($a \rightarrow c$)という特定の状態変化が共通にみられる場合にのみ、コミュニケーションが成り立っている可能性があるというのである。この状態変化とは、たとえば、或る状況のもとで或る行動をするといったことを指すであろう。そのようなときには、社会システムにおける単位（要素）が成立するというわけだが、これは、一つの複合体だけによって存立するのではなくて、二つ以上の複合体の間の「多重構成」によってはじめて構成されるのである。そこで、「コミュニケーションするということは制限（すなわち、自己自身をも他者をも制限のもとに置くこと）を意味する」とも言われているが、これは、双方の複合体とも、数ある状態変化の論理的可能性の中で「aが起こったときにはcが起こる」という変化に制限されるということを述べている。これもまた、可能性の制限として一種の「複合性の縮減」であるといえる。

このように解すると、コミュニケーションとは、当事者たちが、対応しあっている諸可能性を共有するということであると言えよう。その場合、そうした諸可能性を前節の理解にしたがって「内容としての意味」のことと解するなら、コミュニケーションがなりたっているということは、「意味を共有していること」とも言いうるのである。

では、こうした「コミュニケーション」が成立するにいたる過程はどのようなであろうか。詳しくは『社会システム理論』の第三章「^{ダブルコンティンジェンシー}二重の偶然性」や第四章「コミュニケーション」において扱われているが、当面関連する要点だけを見ておく。双方の複合体は、或る出来事[上の例ではa]に対する相手の反応を、相手の内的メカニズムにそくして算定するのではなく、環境のなかで「相互に想定しあい、そのことに基づいて観察すること」によって、上のような対応関係を確認できるのである(SS., D156/J168-9.)。大まかに言えば、相互に、環境のなかでの相手の行動を自分の理解にそくして想定しながら観察することによって双方の諸可能性の対応関係がわかってくるということである。こうして環境のなかで相互に関わることに

よってのみ、「社会システム」は構成されるのである。

八 情 報

次に、「意味」や「コミュニケーション」と関連が深いと思われる「情報」の概念について見ておこう。

一般に、「情報」ないし「情報量」は選択ということと関係している。たとえば、コインの表裏のように、2つの選択肢から1つを選ぶのに必要な情報量が1ビットと呼ばれる。一般的に言えば、 n ビットの情報量は、2の n 乗個の選択肢からなる情報量を表し、例えば3ビットの情報量とは、2の3乗個つまり8個の選択肢からなる情報量を表すことになる。そして、それらの選択肢の間で決定がなされた状態が「情報」と呼ばれるわけである。そこでルーマンは、シャノンなどの定義にしたがい、「情報とは、今日周知の理解によると、……諸可能性のレパートリーからの選択である」(SS., D195/J219.)と言う。そして以下のように、この理解を「システム」に適用する。

「システム状態を選び出す出来事を、情報と呼びたい。システム状態の選び出しは、そのシステムの諸可能性を限定しその諸可能性をあらかじめ大まかに選別している構造に基づいてのみ可能である」(SS., D102/J104.)。

つまり、システムの諸可能性の中で或る状態を選択させるにいたる出来事が「情報」であるというのである。例えば或るシステム状態が或る行為のことであるとすれば、「情報」とは幾つかの選択肢の中から或る行為を選び出させるにいたる事柄である。今日傘をもって出かけるかどうかという選択肢があるとしよう。そのときに天気予報を見て、傘を持っていくことに決めるとすれば、「今日は雨が降るだろう」ということが「情報」なのである。

情報概念がシステムに適用されることによって、「誤謬、価値のないもの、期待はずれ」や、出来事だけでなく「出来事の存続、持続、構造、連続」なども情報となりうる。すなわち、「差異が経験されうるかぎり」で情報としてはたらき、因果関係を引き起こす——原因としてはたらく——ことになる。

では、先に見た「意味」と「情報」はどのように区別されるであろうか。両者は、「同じ意味を持ってくりかえされる情報はもはや情報ではない」という点で異なる。ルーマンは次の例を使って説明している。

「誰かが、ドイツマルクが切り下げられたことを新聞で読む。そのあとで、もしその人が別の新聞でもう一度同じことを読むならば、そのことは、……もはや情報価値をもつことはない」(SS., D102/J104.)。

再度読んだことは同じ「意味」であるが、もはやその人のシステム状態を変化させないの

である。なおここでの「意味」は小論第六節で行った区別にしたがうと「内容としての意味」のことである。

ところで、こうした「情報」はシステム内の或る可能性を排除する結果となるので、一種の「複合性の縮減」である。だが、情報が複合性を高める場合もある。これは、新しい選択肢、すなわち新しい差異を生じさせる情報である¹³。こうした「差異」と「意味」の問題について最後に見ることにしよう。

九 意味の機能

先に見たように「複合性」の観点から、「意味」の機能は次のように要約されていた。

「意味とは、自己準拠にもとづいて複合性を処理するさいの一般的形式にほかならないのであり、こうした形式は、（他の内容を排除したうえでの）特定の内容を言い表すことによって特徴づけられるわけにはいかない」（SS., D107/J111.）。

そして、この形式は、顕在性と可能性の差異、差異と同一性の差異からなるのであったが、後者については、

「意味の機能の仕方を有意味なものを支配する同一性に関係づけるのであれば、それは、意味の機能の仕方を十分に把握していることにはならない」（SS., D111/J115.）

という注意がなされている。たとえば、ルーマンの提出している意味的可能性の増大（細分化）の例を考えてみよう。牧師（Pfarrer）はみな男性だと思っていたのに、会った牧師は女性だったという場合である。こうしたことによって、新しい差異が生まれ、意味における「複合性」は大きくなり、その後の牧師の呼び名（Pfarrin）や自分の行動の仕方の差異を産み出す。ところが、このような事態は「同一性」から出発しては把握されない。「同一性」からは「差異」は出現しないからである。ルーマンはこうした事態を、「情報」概念とも関連させて次のように述べる。

「したがって、はじめに同一性ではなくて差異が存している。そうであるからこそ、偶然に情報価値を与えることができ、そのことによって秩序を構築することが可能になるのである。というのも、情報とは、複数の差異の結合をもたらす出来事——差異をつくる差異——以外のなにものでもないからである」（SS., D112/J116.）。

〈女性の牧師という差異〉と〈呼び名や行動の差異〉とを結びつけるのが、上の「新しい情報」であった。こうして、差異は同一性には決して還元されない重要性をもち、そのゆえに差異と同一性の「差異」という表現が使われていると思われる。

だがこのことを考慮すると、〈差異と同一性の差異〉は〈顕在性と可能性の差異〉とどのように関連しているのであろうか。というのも、差異と同一性は単に〈顕在性および諸可能性

が相互に異なりしかもそれぞれが同一である」というのとは別の含意を持つように思われるからである。小論第三節で見た、この2つの差異を結びつけている文をもう一度考察してみよう。

「差異と同一性の差異は、顕在性と可能性の差異をその操作においてコントロールするために、この差異に対していわば交差するようにはめ込まれている。可能的なものは、(ちょうど顕在化されているものや、再び取りあげられうるものを含めて) さまざまな可能性の差異として把握されるし、そのさいその顕在化される可能性は、その同一性において、これであってほかではないものとして表示される」(SS., D100-101/J102.)。

問題は、「差異と同一性の差異」が「顕在性と可能性の差異」と「交差」していると言われている点である。すなわち前者の差異は後者の差異と(異なる観点からにせよ) 同じことを述べているのではないはずである。そして、上の文の「コントロールするために」、「把握される」、「表示される」という表現に注意するならば、「差異と同一性の差異」は、以前の段階の「顕在性と可能性の差異」を取りあげ直すことによって把握される差異であるように思われる。

そうすると、「交差」というのは、「差異と同一性の差異」が時間的移行ないし動きを示すような形でもう一つの差異に「交差」していることを表していることになる。システムの各段階は以前の「顕在性と可能性の差異」を「自己参照的に」捉え直すことによって次の段階に移行するのである。これは、メルロ＝ポンティが——言語表現に関してではあるが——使った言い方を借りれば、「取りあげ直し」、「裁ち直し」、「差異化différenciation」¹⁴とでも言うべき過程であろう。上の文をこのように理解すると、ルーマンの次の文章も、「意味」の時間的・動的側面を表すものと解することができる。

「……総括すれば、意味とは差異に基づいた処理過程(Prozessieren)なのであり、しかもその差異は、差異としてあらかじめ与えられているものではなく、もっぱら有意義性そのものからその差異の操作的な使用可能性……を獲得している差異なのである」(SS., D101/J103.)。

この文は、『社会システム理論』におけるルーマンの「意味」概念を要約したものと言えよう。

こうした指摘に続いてルーマンは、「意味」の「3つの次元(Dimension)」として、〈これ〉と〈あれ〉といった地平構造による「事象次元」、以前・以後という差異による「時間次元」、環境についての相互主観的経験にかかわる「社会次元」という次元をたてている。それぞれが差異を生じさせるものであるが、「時間次元」とは上で見た意味の時間的・動的側面と解することができる。また、「社会次元」は小論第七節で見た「コミュニケーション」の問題とかかわる。これらについて論ずる余裕はないが、それぞれがフッサールの取り組んだ問題

を思い起こさせるものである。

フッサールの「意味」の取り扱い、[差異]の問題をはらみつつもどちらかというと「同一性」に重点をおいたものであったが、ルーマンは、いわばフッサールの「意味」概念の図と地を反転させたような、またメルロ＝ポンティの「差異化」の思想を思いうかべさせるような見方をシステム論の「複合性」の考察から提出していると言えよう。

* * *

フッサールの現象学とルーマンのシステム論における「意味」の概念を概観し、ルーマンにそくして、コミュニケーションと情報の概念を見てきた。ルーマンの「意味」の扱いは、[システムと環境との複合性の差異]という構想の中に「意味の機能」を位置づけ、そして、「複合性」の概念にもとづいて意味を「コミュニケーション」や「情報」とも関連させているという点に特徴がある。この構想は、意味概念の解明を通じて、現代における「他者」、[コミュニケーション]、[情報]などの問題を考察する場合の基本的構図の一つとなろう。

この構想をフッサールの「超越論的現象学」と対比してみると、ルーマンはフッサールの「超越論的主観性」にあたるものを「複合性をそなえたシステム」と捉えており、そのことによって、「システムと環境との（複合性の）差異」という見方が可能になっているといえよう。だが、ルーマンの構想には統括的な「主観性」が存在しないために、「心理システム」、[社会システム]、[有機体としてのシステム]などは、主観性によって関連づけられるようになってはいない。ルーマンの構想は重大な見方の転換を迫るものであるが、これらの諸システム間の関連がどのようになっているのかなどという点についてはさらに検討が加えられるべきである。そのためには、ルーマン自身の論述だけでなく、フッサールをはじめとする現象学者の分析が有益だと思われる。

こうした問題が現実の諸環境のなかでのわれわれのあり方の考察に通ずることを思いつつ、筆をおきたい。

註

*1 小論における引用文献と引用方法は以下のとおりである。なお、引用文中のイタリック体は原文における強調、上部の点は小論筆者による強調を示す。

a) Edmund Husserl, “*Logische Untersuchungen*”, Husserliana Band XIX/2, 1984, Nijhoff.

邦訳『論理学研究4』, 立松弘孝訳, みすず書房, 1976年。

b) Edmund Husserl, “*Erfahrung und Urteil*”, 1972, Felix Meiner.

邦訳『経験と判断』, 長谷川宏訳, 河出書房新社, 1975年。引用の際は, EUと略記し, 節の番号を付

記する。

- c) Niklas Luhmann, “*Soziale Systeme*”, 1987, Suhrkamp.

邦訳『社会システム理論（上）（下）』，佐藤勉監訳，恒星社厚生閣，1993年。

引用の際は，SS.と略記する。頁数の指示は，ドイツ語原典のページ数をD，邦訳の頁数をJのあとの数字で示す。

- d) “*Moderne Systemtheorien als Form gesamtgesellschaftlicher Analyse*”, “*Sinn als Grundbegriff der Soziologie*”, in “*Theorie der Gesellschaft oder Sozialtechnologie*” (Jürgen Habermas/ Niklas Luhmann, Suhrkamp Verlag, 1971).

邦訳「社会全体の分析形式としての現代システム理論」，「社会学の基礎概念としての意味」，ハーバマス，ルーマン『批判理論と社会システム理論 上』佐藤嘉一他訳，木鐸社，1984年所収。引用の際は，TOS.と略記する。頁数の指示は上と同様とする。

- *2 「第六研究」の第4節を参照。

- *3 『論理学研究』における志向性の分析は，「第六研究」の第26節，第27節においてまとめられている。

- *4 cf. EU. § 86～§ 88.

- *5 メルロ＝ポンティ，『行動の構造』（滝浦静雄，木田元訳，みすず書房）第二章第三節「行動の構造」参照。

- *6 この語は「複雑性」と訳すことも可能で，2つの「複合性」の比較が問題になる文脈では「複雑性」という用語のほうが理解しやすい場合もあるが，のちに見るように「諸要素間の可能な関係」つまり「複合」がその元来の意味なので，小論では「複合性」の語を使った。

- *7 この文の理解については，小論第八節で再考する。

- *8 この転換については，〈SS.,D51/J43.〉および〈SS.,D108-9/J111-2.〉も参照。

- *9 そのほか，両システムが「共同進化の過程において発生したということ」も2つのシステムの関係点として挙げられている。

- *10 「全体」の概念や他のシステム概念とルーマンのシステム概念の違いについては，『社会システム理論』の序章「システム理論におけるパラダイム転換」を参照。

- *11 〈SS., D47/J38.〉を参照。なお，システムは「部分システム」に「分化(Differenzierung)」することもあり得る。例えば家は部屋という部分システムに分化しうるが，最終的な要素は，石，角材，釘などである。

- *12 ルーマンは具体例を提示していないが，最も単純な場合を考えれば次のようになるであろう。つまり，関係の仕方がすべて同じであり，2項の間の順序のある関係である，といった場合である。もちろん，さまざまな種類の関係や多項間の関係も想定しうる。

- *13 これとの関連で，ルーマンは，「1ビットの情報は差異を生み出す差異として定義できる」というG. ベイトソンの言葉を引いている(SS.,D68/J63.)。

- *14 cf. M. Merleau-Ponty, “La prose du monde”, Gallimard, 1969, P45, P47, P51. (邦訳，『世界の散文』（滝浦静雄，木田元訳，みすず書房，1979年，51，53，58頁。）ただし，邦訳は「示差活動」，「差異を示す」などの語を使っている。

Eine Betrachtung über den Sinnbegriff in der Phänomenologie und den in der Theorie der Sozialen Systemen

Masahisa OGUMA

Einerseits, nach Husserl, “Sinn” ist das zentrale Element der Intentionalität. Andererseits, nach Luhmann, die Umwelt ist für psychische und soziale Systeme in der Form “Sinn” gegeben. So “Sinn” ist der Hauptbegriff für Husserls Phänomenologie und für Luhmanns Systemtheorie.

Die Aufgabe dieses Aufsatzes besteht darin, den Zusammenhang des Sinnbegriffs in der Phänomenologie Husserls mit dem in der Theorie der Sozialen Systemen Luhmanns deutlich zu machen und zu analysieren.

Husserls Phänomenologie hat die Horizont-Struktur und Möglichkeitselement in den Sinnphänomenen gefunden. Luhmann akzeptierte diesen Befund in seiner Systemtheorie und bestimmte die Funktion des Sinnes nach seinem Gedanke von der System/Umwelt-Differenz. Nach Luhmann ist Sinn “eine allgemeine Form der selbstreferentiellen Einstellung auf Komplexität” .

In Zusammenhang mit diesem Sinnbegriff hat Luhmann den Begriff von Kommunikation und den von Information behandelt. In diesem Aufsatz habe ich auch diese Sachen unter dem Gesichtspunkt vom Sinn betrachtet.